

博士論文（要約）

論文題目 芥川龍之介研究

氏名 小谷 瑛輔

目次

序章 問題の所在と方法論の提示	1
一 芥川文学の浅薄さをめぐって	1
二 ブッキッシュな作家像	3
三 文学理論と芥川文学	4
四 理智の敗北というイメージ	6
第一章 不可能としての主題——「羅生門」「鼻」「酒虫」	10
一 芥川初期小説における語りと主題	10
二 「羅生門」——反語的修辭としての完結性	12
三 「鼻」——二転する語り	18
四 「酒虫」——寓話の不可能性	21
五 初期芥川的主題における逆説	23
第二章 作為を隠すという作為——「手中」	25
一 「手中」と演劇論	25
二 小宮豊隆とバーナード・ショー	27
三 バーナード・ショーと問題文芸論	31
四 型と臭味	36
五 長谷川先生の憂鬱	40
第三章 「小説」の条件と「人間」性——「芋粥」「或日の大石内蔵之助」	43
一 「人間」を描くということ	43
二 「芋粥」	46
三 「或日の大石内蔵之助」	52
四 「小説」の不可能性	56
第四章 「新技巧派」の面目——「南瓜」	59
一 反真实性としての虚構性	59
二 虚構性の表徴	62
三 新技巧派の「真面目」	66
四 「西郷隆盛」、「黄梁夢」	70

第五章 探偵小説と告白——「開化の殺人」	74
一 探偵と「下等」な知性	74
二 北島の演劇性	76
三 成立の過程と完成原稿	79
四 完成原稿が示すこと	83
五 一人称告白体と演劇性	87
六 「彼岸過迄」と「ゲダンケ」	89
第六章 成功する虚構のパラドックス——「龍」「蜜柑」	95
一 「龍」の自己言及性	95
二 現実化する虚構のアポリア	97
三 「蜜柑」の虚構性	102
四 自己表現を超えて	107
第七章 回帰する明治の「狂人」と「怪物」——「疑惑」	109
一 三つの時間と作品の謎	109
二 明治四十年代の実践倫理学者と「狂人」	112
三 回帰する「狂人」の時間	116
四 欠けた指	119
五 伝染する「疑惑」の力学	120
六 「理智」と「狂気」	123
終章 奇蹟と不可能——「きりしとほろ上人伝」「じゅりあの・吉助」「尾生の信」「南京の基督」「往生絵巻」「仙人」	125
一 芥川作品の一面性をめぐって	125
二 「神聖な愚人」の系譜	126
三 「尾生の信」	130
四 「南京の基督」、「往生絵巻」、「仙人」	133
五 奇蹟と不可能	137
註	140
初出一覧	155

本文

増補、改稿を加えて小谷瑛輔『小説とは何か?——芥川龍之介を読む』(ひつじ書房、二〇一七年十二月、ISBN: 978-4-89476-889-5) として出版済。

参考文献一覧

全集

- 『芥川龍之介全集』（全二十四巻、岩波書店、平成十九年一月～二十年十二月）
『漱石全集』（全二十八巻＋別巻、岩波書店、平成十四年四月～平成十六年九月）

序章

（二次資料）

坪内逍遙『小説神髓』（松月堂、明治十八年九月）

（二次資料）

- 中村真一郎『芥川龍之介』（要書房、昭和二十九年十月）
中村真一郎、梅崎春生、佐々木基一、寺田透、三島由紀夫、安部公房、野間宏「芥川龍之介と現代作家（座談会）」『芥川龍之介案内』岩波書店、昭和三十年八月）
ジェラルド・ジュネット著、花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』（水声社、昭和六十年九月）
宮本顕治「敗北」の文学」『改造』昭和四年八月）

第一章

（二次資料）

- 青頭巾「読んだもの」『新潮』大正五年四月）
加藤武雄「芥川龍之介氏を論ず」『新潮』大正六年一月）
小宮豊隆「今月読んだ戯曲、小説」『時事新報』大正五年九月十九日）
田中純「所謂新技巧派の人々」芥川・里見・有嶋三氏の作を読む」『時事新報』大正七年一月二十七日）
夏目漱石「文芸の哲学的基礎」『東京朝日新聞』明治四十年五月四日～六月四日）

（二次資料）

柄谷行人「芥川龍之介における現代『藪の中』をめぐる」『国文学』昭和四十七年十

二月)

笹淵友一「芥川龍之介「羅生門」新釈」(『山梨英和短期大学創立五十五周年記念、国文学論集』昭和五十六年十月)

水洞幸夫「芥川龍之介「羅生門」論——下人が盗みをする理由——」(『金沢大学国語国文』平成二十一年三月)

関口安義「自己解放の叫び——「羅生門」——」(『芥川龍之介 実像と虚像』洋々社、昭和六十三年十一月)

高橋博史「『羅生門』」(『解釈と鑑賞』平成十一年十一月)

東郷克美「佇立する芥川龍之介」(高田瑞穂編『大正文学論』有精堂、昭和五十六年二月)

三谷邦明「『羅生門』の言説分析——方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方」『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』(有精堂、平成八年六月)

三好行雄『芥川龍之介論』(筑摩書房、昭和五十一年九月)

第二章

(一次資料)

青頭巾「文壇時事」(『新潮』大正四年十二月)

青頭巾「文壇時事」(『新潮』大正五年四月)

閻太郎「大入袋」(『文芸倶楽部』明治四十三年六月)

アンドレー「新思潮の人々」(『文芸雑誌』大正五年十一月)

生田長江「問題文芸の意義」(『新潮』大正四年九月)

小山内薫「模型舞台の前で」(『演芸画報』大正四年一月)

小山内薫「小宮豊隆君に呈す」(『新小説』大正四年三月)

小山内薫「心から型へ」(『演芸画報』大正四年三月)

加能作次郎「九月の主なる創作」(『太陽』大正五年十月)

草田杜太郎「蘆花の近業と伊庭の芝居」(『中外日報』大正四年一月十五日)

小宮豊隆「牧師の家」(『東京朝日新聞』明治四十三年五月五日)

小宮豊隆「中村吉右衛門論」(『新小説』明治四十四年八月)

小宮豊隆「新脚本号」を批評す 三 (『時事新報』大正三年七月二十六日)

小宮豊隆「ショオの『武器と人』」(『新小説』大正三年八月)

小宮豊隆「アンドレイエフの「星の世界へ」——自由劇場第八回公演——」(『新小説』

大正三年十一月)

小宮豊隆訳「ストリントベルクの俳優論(一)」「(『新小説』大正四年三月)

小宮豊隆「今月読んだ戯曲、小説 三」「(『時事新報』大正五年九月十九日)

島村抱月「東京の新社会劇を観る」「(『読売新聞』明治四十三年五月六日)

相馬御風「十二月の文藝(3)」「(『時事新報』大正二年十二月九日)

相馬御風「問題文芸に就ての対話」「(『新潮』大正四年九月)

谷崎潤一郎「門」を評す」「(第二次『新思潮』明治四十三年九月)

谷崎潤一郎「和辻君について」「(『和辻哲郎全集 内容見本』岩波書店、昭和三十六年十月)

田山花袋「評論の評論」「(『趣味』明治四十一年十一月)

田山花袋「広い空間」「(『文章世界』大正四年十一月)

近松秋江「問題は深さに依つて生ず」「(『新潮』大正四年九月)

坪内逍遙「新脚本に対する注文」「(『趣味』明治四十年五月)

坪内逍遙「新脚本とその前途」「(『早稲田文学』明治四十三年五月)

坪内逍遙「劇は教化機関なりや」「(明治四十四年早稲田大学講話、『教化と演劇』尚文館書店、大正四年一月に収録)

坪内逍遙「教化を標榜せる演劇」(大正二年春東京市教育会講説、「ショー其人及び其作」と改題して『教化と演劇』尚文館書店、大正四年一月に収録)

坪内逍遙「民衆教化と演劇」(初出未詳、『それからそれ』実業之日本社、大正十年一月に「大正八年七月」の文章として収録)

内藤濯「問題文芸の意義、価値及び形式」(『早稲田文学』大正四年九月)

中村吉蔵「牧師の家」予告(『東京朝日新聞』明治四十三年一月二十九日、三十日)

中村吉蔵『牧師の家』序文(新橋堂、明治四十三年五月)

中村春雨「脚本兼子夫人」(『文芸倶楽部』明治四十三年五月)

中村春雨「バーナード・ショウ氏との会見」(『国民新聞』明治四十三年一月七日〜九日)

中村春雨「牧師の家」(『東京朝日新聞』明治四十三年二月)

中村星湖「問題文芸の提起」(『読売新聞』大正四年一月一日)

中村星湖「続月評始め」(『時事新報』大正四年一月二十三日)

夏目漱石「三四郎」(『朝日新聞』明治四十一年九月一日〜十二月二十九日)

夏目漱石「田山花袋君の答ふ」(『国民新聞』明治四十一年十一月七日)

夏目漱石「明暗」(『東京朝日新聞』大正五年五月二十六日～十二月十四日)
バーナード・ショー作、和辻哲郎訳「脚本恋をあさる人」(『演芸画報』明治四十三年三月～四月)
長谷川天溪「青鉛筆(シヨウ氏の脚本につきて)」(『文章世界』大正二年十二月)
本間久雄「本年の評論壇の記憶(中)」(『読売新聞』大正二年十二月二十七日)
正宗白鳥「問題文芸の意義、価値及び形式」『早稲田文学』(大正四年九月)
松居松葉「驚くべき成功だ」(『歌舞伎』明治四十五年七月)
山田櫛榔「三月の文壇」(『帝国文学』大正三年四月)
山田櫛榔「問題文芸の意義、価値及び形式」『早稲田文学』(大正四年九月)
和辻哲郎「転向」(『新小説』大正五年五月)

(二次資料)

浅野洋「手巾」私注『立教大学日本文学』(昭和五十八年十二月)
磯貝英夫「手巾」(『国文学』昭和四十七年十二月)
榎本隆史「問題文芸論」について」(『国文学研究』昭和三十五年十月)
大里恭三郎「芥川龍之介『手巾』論」(『常葉国文』昭和五十四年六月)
酒井英行「二人の〈賢母〉」(『文芸と批評』平成元年九月)
清水義和『ショー・シェイクスピア・ワイルド移入史』(文化書房博文社、平成十一年三月)
十川信介「解説 一九一五年(大正四)年の文学界」(『編年体大正文学全集』第四卷、ゆまに書房、平成十三年一月)
藤木宏幸『『牧師の家』研究——春雨から吉蔵への道』(『芸術学』昭和三十八年六月)
丸山美賀子「手巾」考」(『就実語文』昭和五十九年十二月)
三島由紀夫「手巾」「南京の基督」ほか」(芥川龍之介『南京の基督』、角川書店、昭和三十一年九月)
三好行雄「芥川龍之介論・第一章——大川の水——」(『現代のエスプリ』至文堂、昭和四十二年三月)
吉田精一『芥川龍之介』(三省堂、昭和十七年十二月)

第三章

(二次資料)

- 青頭巾「文壇時事 読んだもの」(『新潮』大正五年四月)
江口渙「芥川君の作品」(『東京日日新聞』大正六年六月二十八日〜七月一日)
江口渙「九月の小説と戯曲」(『帝国文学』大正六年十月)
小川未明「四月の小説を評す」(『太陽』大正五年五月一日)
加藤武雄「芥川龍之介氏を論ず」(『新潮』大正六年一月)
加能作次郎「三月の創作と評論」(『時事新報』大正五年三月十日)
K「不同調」(『新潮』大正六年十月)
田中純「四月の創作」(『時事新報』大正五年四月二十日)
田中純「新技巧派の意義及びその人々」(『新潮』大正六年十月)
徳田秋声「盗心」(『新小説』大正五年三月)
徳田秋声「陰影」(『中央公論』大正五年四月)
豊島与志雄「弱者」(『新潮』大正五年一月)
中村孤月「一月の文壇」(『読売新聞』大正六年一月十三日)
西川勉「新秋の文壇」(『文章世界』大正六年十月)
廣津和郎「廣津和郎評論(文芸)」(『洪水以後』大正五年二月一日)
森田草平「新秋の創作を読む」(『時事新報』大正六年九月六日)

(二次資料)

- 奥野久美子「大正前期の歴史小説・史劇論」(『京都大学国文学論叢』平成十三年十一月)
重松泰雄「芋粥 芥川文学の作品構造」(『国文学』昭和四十五年十一月)
高橋博史『芥川文学の達成と模索——「芋粥」から「六の宮の姫君」まで』(至文堂、平成九年五月)
東郷克美『「芋粥」』(菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介研究』明治書院、昭和五十六年三月)
松本常彦「弱者の変容・弱者の土壌」(『国文学』平成十三年九月)
三好行雄『芥川龍之介論』(筑摩書房、昭和五十一年九月)

第四章

(二次資料)

- 江口渙「芥川君の作品」(『東京日日新聞』大正六年二十九日)
- 加藤武雄「芥川龍之介氏を論ず」(『新潮』大正六年一月)
- 島村抱月「文芸上の自然主義」(『早稲田文学』明治四十一年一月)
- 逍遙生「今年初半文学界(小説界)の風潮」(『読売新聞』明治二十三年八月四日)
- 逍遙「日本で演ずる「ハムレット」」(『趣味』明治四十年九月)
- 網島梁川「英詩文評釈付録 ハムレット解題」(坪内雄蔵著『英詩文評釈』東京専門学校、明治三十五年六月)
- 坪内逍遙「近松とシェークスピア」(『近松傑作全集第一巻』早稲田大学出版部、明治四十三年六月)
- 中谷丁藏(小島政二郎)「地獄変」(『三田文学』大正七年六月)
- 秦豊吉「十月文壇」(『時事新報』大正五年十月八日)
- 三田村鳶魚「加保茶四代記」(『日本及日本人』大正四年八月十五日)
- 三田村鳶魚「奈良茂の情事」(『日本及日本人』大正五年八月十五日)

(二次資料)

- 五島慶一「西郷隆盛」論——見ることと記憶・認識の揺らぎ——」(『日本近代文学』平成十八年十一月)
- 小宮豊隆「今月読んだ戯曲、小説」(『時事新報』大正五年九月十九日)
- シェイクスピア著、坪内逍遙訳『ハムレット』(富山房、明治四二年十二月)
- 篠崎美生子「芸術」家の変容——文体から情報へ」(『国文学』平成十三年九月)
- 水洞幸夫「首が落ちた話」・「西郷隆盛」の位置——解釈する人々——」(『学葉』平成二年十二月)
- 田中純「新技巧派の意義及びその人々」(『新潮』大正六年十月)
- 中村星湖「今年の小説壇(上)」(『読売新聞』大正五年十二月五日)
- 花田俊典「注釈」(『芥川龍之介全集』第三巻、岩波書店、平成八年一月)
- 前田愛『文学テキスト入門』(筑摩書房、昭和六十三年三月)
- メリメ著、生田長江訳「カルメン」(『三田文学』大正二年十月)
- 森田草平「新秋の創作を読む」(『時事新報』大正六年九月六日)
- 吉田精一「芥川文学の出典」(『近代文学鑑賞講座 第十一巻 芥川龍之介』角川書店、昭和三十三年六月)

第五章

(二次資料)

- アンドレイエフ著、上田敏訳『心』(春陽堂、明治四十二年六月)
- 江戸川乱歩が『幻影城』(岩谷書店、昭和二十六年五月)
- 神田孝平訳、成島柳北編『楊牙児奇談』(出版人 中川鉄次郎、明治十九年十一月)
- 志賀直哉「杳掛にて——芥川君の事」(『中央公論』昭和二年九月)
- 島村抱月「探偵小説」(『早稲田文学』明治二十七年八月)
- 夏目漱石「吾輩は猫である」(『ホトトギス』明治三十八年一月〜三十九年八月)
- 夏目漱石「趣味の遺伝」(『帝国文学』明治三十九年一月)
- 夏目漱石「それから」(『東京朝日新聞』明治四十二年六月二十七日〜十月四日)
- 夏目漱石「彼岸過迄」(『東京朝日新聞』明治四十五年一月一日〜四月二十九日)
- 夏目漱石「こころ」(『東京朝日新聞』大正三年四月二十日〜八月十一日)
- 森鷗外が「雁」(『スバル』明治四十四年九月)
- 「女優馬利比越児の審判」(『朝野新聞』明治十三年八月十二日〜二十六日)
- 「雑報」(『朝野新聞』明治十二年六月五日)
- 「楊牙児ノ奇獄」(『花月新誌』明治十年九月四日〜十一年二月十四日)

(二次資料)

- 赤羽学「歪められた親子関係の超克——漱石の『彼岸過迄』の提示する問題」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』平成十五年三月)
- 五十嵐裕「探偵／警察を巡る考察——『彼岸過迄』を中心に」(『文学特集 1910年代』平成十八年四月)
- 伊東静雄『明治の探偵小説』(晶文社、昭和六十一年十月)
- 伊藤秀雄「漱石の探偵小説『彼岸過迄』を中心として」(『漱石研究』平成十年十一月)
- 内田隆三「探偵小説という謎」(『いいちこ』平成九年一月)
- 内田隆三「猫と探偵と二十世紀——探偵小説という謎(二)」(『いいちこ』平成九年四月)
- 大岡昇平「『彼岸過迄』をめぐる」(『展望』昭和四十九年八月)
- 小野隆「開化の殺人」論」(『専修国文』平成八年八月)
- 角田忠蔵編纂・解説『芥川龍之介自筆未定稿図譜』(大門出版美術出版部、昭和四十六年)

- 九月)
- 柄谷行人「解説」『彼岸過迄』（新潮社、平成二年十月）
- 菊地弘「芥川龍之介における「近代」——『開化の殺人』『開化の良人』を読んで」（『跡見学園女子大学国文学科報』平成二年三月）
- 倉田喜弘『芝居小屋と寄席の近代——「遊芸」から「文化」へ』（岩波書店、平成十八年九月）
- 郷原宏『物語日本推理小説史』（講談社、平成二十二年十一月）
- 酒井英行「『開化の殺人』、『開化の良人』について」（『静岡近代文学』平成四年八月）
- 佐々木亜紀子「『彼岸過迄』と『ゲダンケ』——梗概を拒む「小説」」（『愛知淑徳大学国語国文』平成十三年三月）
- 芝市郎「あかり・探偵・欲望 『彼岸過迄』をめぐる」（『漱石研究』平成十年十一月）
- 桂秀実『探偵のクリティック』（思潮社、昭和六十三年七月）
- 中川右介『歌舞伎座物語』（PHP研究所、平成二十二年四月）
- 中島河太郎『日本推理小説史 第一巻』（東京創元社、平成五年四月）
- 長山靖生「見られる探偵、欲望する告白者——『彼岸過迄』における「謎」の在所」（『国文学』平成十八年三月）
- 西田一豊「芥川龍之介「開化の殺人」論」（『千葉大学人文社会科学科学研究』平成二十二年九月）
- 林未織「探偵のディスクール——『彼岸過迄』における青年たちの物語」（『奈良教育大学国文研究と教育』平成二十五年三月）
- 平岡敏夫「漱石・芥川の一系譜——『彼岸過迄』と「捨児」（熊坂敦子篇『迷羊のゆくえ』翰林書房、平成八年六月）
- 藤井省三『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』（平凡社、昭和六十年四月）
- 松本常彦「開化の二人」（海老井英次、宮坂覺編『作品論 芥川龍之介』双文社出版、平成二年十二月）
- 宮崎かすみ「探偵の記号論——『彼岸過迄』とホームズ物語」（『聖徳大学総合研究所論叢』平成七年十一月）
- 三好行雄『芥川龍之介論』（筑摩書房、昭和五十一年九月）
- 横井司「芥川龍之介」（権田萬治、新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社、平成十二年二月）

吉田精一「芥川龍之介の生涯と芸術」(中村真一郎編『芥川龍之介案内』岩波書店、昭和三十年八月)

和田北斗「(監視)する視線『彼岸過迄』論——「探偵小説」から「写生文」へ」(『文学

特集 1910年代』平成十八年四月)

『芥川龍之介資料集』(山梨県立文学館、平成五年十一月)

『芥川龍之介展 初公開「鼻」などの完成原稿』(秀明大学、平成二十四年十一月三日)

第六章

(一次資料)

斯定釜『聖人伝』(武市誠太郎出版、明治三十六年二月)

(二次資料)

小原元「芥川龍之介『蜜柑』の鑑賞」(『解釈と鑑賞』昭和二十一年四月)

小野塚力「芥川龍之介『龍』試論——「三月三日」という日付の意味するもの」(『二松学舎大学人文論叢』平成九年十月)

門倉正二「『蜜柑』と『檸檬』」(『言語と文芸』昭和五十六年十一月)

菅野昭正「芥川龍之介の文体」(『国文学』昭和五十年二月)

菊地弘「芥川龍之介『蜜柑』」(『解釈と鑑賞』昭和五十年二月)

高橋大助「象徴としての蜜柑、身体としての蜜柑——芥川龍之介「蜜柑」をめぐって」(『國學院雑誌』平成三年十月)

武田昌憲「芥川龍之介と『龍』」(『茨女国文』平成十三年三月)

田中厚一「典拠からの逸脱、あるいは架橋としての「龍」」(『帯広大谷短期大学紀要』平成五年三月)

田中美「芥川文学研究ノート③『鼻』と『龍』」(『都留文科大学研究紀要』平成六年三月)

藤井貴志『芥川龍之介〈不安〉の諸相と美学イデオロギー』(笠間書院、平成二十二年二月)

宗像和重「大正九(一九二〇)年の「私小説」論——その発端をめぐって」(『早稲田大学教育学部学術研究(国語国文学)』昭和五十八年十二月)

矢野昌邦「芥川龍之介『蜜柑』考」(『明治大学日本文学』昭和五十三年三月)

第七章

(一次資料)

木村鷹太郎 「文部省の一大怪事(教育勅語に対する大不敬)」(『日本主義』明治三十四年一月二十日)

木村鷹太郎 「横議十行 文部省は危険思想の府なり」(『読売新聞』明治四十四年二月九日)

吟月生 「韓國下等の民情」(『滿韓之實業』明治四十二年十二月一日)

隈本有尚 「哲学館認可取消事件(当事者たる隈本視学官の談)」(『読売新聞』明治三十六年一月二十九日)

桑木巖翼 「ミュアヘッドの倫理学書に就いて」(『読売新聞』明治三十六年二月六日)

網島栄一郎 「哲学館事件に関する倫理学上動機の意義を論じ併せてミュアヘッド氏の動機論を評す(承前)」(『早稲田学報』明治三十六年四月二十五日)

徳富健次郎 「謀叛論(草稿)」(『謀叛論 他六篇・日記』岩波書店、昭和五十一年七月)

中島徳蔵 「哲学館事件及余が弁解」(『丁酉倫理会倫理講演集』明治三十六年二月十六日)

中島徳蔵 「文部当局者に告ぐ」(『読売新聞』明治三十六年二月二十一日)

中島徳蔵 「文部当局者に告ぐ(承前)」(『読売新聞』明治三十六年二月二十二日)

ミュアヘッド原著 桑木巖翼補訳『倫理学』(富山房、明治三十年五月)

「教育界の大怪事」(『京華日報』明治三十四年一月十一日)

「兇漢の身許」(『東京日日新聞』明治四十二年十一月二日)

「兇行者の身元」(『万朝報』明治四十二年十一月二日)

「凶報新事実発見指を切りて」(『読売新聞』明治四十二年十一月三日)

「拘引後の社会主義者」(『読売新聞』明治四十一年六月二十四日)

「事に原因あり」(『時事新報』明治四十四年一月二十四日)

「時事評論 噫伊藤公」(『朝鮮』明治四十二年十一月)

「社会主義者送致」(『時事新報』明治四十一年六月二十四日)

「社会主義者の狂態」(『東京日日新聞』明治四十一年六月二十四日)

「社会主義者暴行続報」(『大阪朝日新聞』明治四十一年六月二十四日)

「社会党員の醜体」(『万朝報』明治四十一年六月二十四日)

「前代未聞の事件」(『時事新報』明治四十四年一月二十日)

「第一次小学修身書編纂趣意報告」(明治三十七年三月)

「南北朝対立問題（国定教科書の失態）」（『読売新聞』明治四十四年一月十九日）
「被告に接見したる鎌田弁護士の談」（『時事新報』明治四十三年二月九日）
「不敬漢あり 教育勅語の撤回を唱ふ」（『富士新聞』明治三十四年二月一日）
「文芸時評 富士新聞を読みて」（『太陽』明治三十四年三月五日）
「無政府主義社会党员騒擾続報 留置所内の狂態 女に似気なき豪語」（『東京朝日新聞』明治四十一年六月二十四日）
「問題更に拡大せむ（南北両朝問題）」（『読売新聞』明治四十四年二月二十二日）
「有力なる後援者」（『時事新報』明治四十二年十一月三日）

（二次資料）

稲田智恵子「芥川龍之介「疑惑」——失われた言葉を求めて崩壊する自我」（『国文目白』平成十一年二月）
井上諭一「芥川龍之介「疑惑」論」（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』平成六年三月）
片山清一編『資料・教育勅語』（高陵社書店、昭和四十九年四月）
清水康次「芥川龍之介の方法——物語と作者」（『女子大文学 国分篇』昭和五十九年三月）
水洞幸夫「芥川龍之介「疑惑」試論」（『金沢学院大学紀要』平成二十年三月）
関口安義『芥川龍之介新論』（翰林書房、平成二十四年五月）
副田賢二「芥川龍之介「疑惑」論——「語ること」をめぐる転換」（『国語と国文学』平成十年七月）
東郷克美「地獄と救済——芥川龍之介論」（川副国基編『文学・一九一〇年代』明治書院、昭和五十四年三月）
松本常彦「注解」（『芥川龍之介全集』平成八年二月）
三浦節夫編「『哲学館事件』 文献年表」（『井上円了センター年報』平成二十年九月）

終章

（一次資料）

大賀順治編『支那奇談集』（近事画報社、明治三十九年四月）
南部修太郎「最近の創作を読む 六」（『東京日日新聞』大正九年七月十一日）

(二次資料)

鷺只雄「愚人と殉教——「きりしとほろ上人伝」攷」(『大正文学論集』有精堂、昭和五十六年二月)

笹淵友一「芥川龍之介のキリスト教思想」(『解釈と鑑賞』昭和三十三年八月)

柴田天馬『聊齋志異研究』(創元社、昭和二十八年)

関口安義「南京の基督」論(『芥川龍之介研究年誌』平成二十一年三月)

張蓄「尾生の信」覚え書(『国文鶴見』平成十二年十二月)

長野誉一『古典と近代作家——芥川龍之介——』(有朋堂、昭和四十二年四月)

仁平道明「芥川の二つの「尾生の信」」(『静岡大学教養部研究報告』昭和五十三年三月)

宮坂覚「芥川文学における〈聖なる愚人〉の系譜」(『文芸と思想』昭和五十二年三月)

三好行雄「解説」(『舞踏会・蜜柑』角川書店、昭和四十三年十一月)

山田篤郎「尾生の信」(『芥川龍之介大事典』勉誠出版、平成十四年七月)

吉村稠「芥川龍之介の〈愚直者〉への憧憬——未定稿「尼と地藏」を中心にして——」(『園

田国文』昭和六十二年三月)

論文の内容の要旨

論文題目 芥川龍之介研究

氏名 小谷 瑛輔

本論文は、芥川龍之介の前期作品研究を通じて、近代文学の可能性を問い直す試みである。芥川龍之介の作品はしばしば日本の近代文学の典型と目され、また同時に近代文学の典型から外れた浅薄な作品とも評される、両義的な存在である。本論文では、浅薄と見なされてきた特徴に注目し、そうした性質の持つ近代文学の可能性への批評性を可能な限り抽出することを試みる。序章では、このような本論文の問題意識とその為の方法論について記述した。

第一章では、芥川の代表作とされる「羅生門」(大下)、「鼻」(大上)を中心に検討した。

芥川龍之介の初期作品では、語り手が可視化され、中心となる話題が語り手によって反復され、作品の完結性が強調される。しかし、作品で中心化される問題は明らかに示されるにもかかわらず、答を決定し難いというのもこれらの作品の大きな特徴である。本章では、こうした空白を、解釈によって埋めるのではなく、問題による中心化がどのような機能を果たしているかを改めて検討し、そこにある芥川初期作品の固有の問題を明らかにする。

「羅生門」「鼻」の語りは「餓死をするか盗人になるか」「この鼻によつて傷けられる自尊心」といった問題を、積極的に作品を中心化するものとして強調するが、語り手はその問題が有効に機能しなくなる時点までを見届けた上で、あたかも何かが完結したかのように作品を閉じる。こうした作為的な語り手の可視化は、意図の下に出来事を整理することの不可能性をむしろ可視化するのであり、完結性の装いは、反語的な修辞として機能する。また、同時代に発表された小編「酒虫」(大下)では、まさに主題的な整理が不可能であることこそが直接的に述べられ、芥川がこうした問題を意識していたことが見て取れる。

第二章では、芥川の『中央公論』デビュー作「手巾」(大下)について検討した。本作は、武士道の批判という主題が明確だと評価される一方で、作家自身の問題を棚上げした、作意が露骨な浅い作品であると批判されてきた。しかし、本作が参照する小宮豊隆と小山内薫の間の論争や同時代の文芸批評を確認すれば、芥川が批判されると同型の論理で排

撃されていたバーナード・ショーの名が本作にさりげなく織り込まれていることから、長谷川先生を通じて問われているのがまさに同時代の文学パラダイムで問題になっていた「作意の露骨さ」であることが分かる。「手巾」作中には、ショーの名の他にも「型」や「臭味」といった、芥川の作風を否定するはずの言葉がキーワードとして散りばめられており、本作は、芥川に向けられた批判自体を扱った作品と言える。作中で鍵となるストリントベルクの「二重の演技」批判では、露骨な表現は「臭い」ものとして否定されるが、露骨さを避けて隠そうとすることもやはり、隠す作為によって「臭い」ものとされる。心を秘すことが表現の深さという価値を生む、という立場の小宮によって訳されたストリントベルクの文章が、まさにそうした小宮の考え方を否定する力を持つということがここでは暴かれている。長谷川先生への皮肉には、作者芥川に向けられてきた批判への皮肉が重なるのである。批判する側を安全地帯から引きずり降ろしつつ、自らも逃げ場の無い論理の空間を構築するのが「手巾」であったことを見れば、本作は従来言われてきたような作家の問題に関わらない安楽な作品などではなく、むしろ同時代が見過ごしてきた虚構一般のアポリアと向き合っていく新進作家のマニフェストだったことが明らかになる。

第三章では、芥川が評価を高めていく「芋粥」(大㉔)「或日の大石内蔵之助」(大㉕)について検討した。デビュー期の芥川龍之介「羅生門」「鼻」への評価には、「小説」の本流としては認められないという留保がつきまどっていた。その鍵となるのが、「人間」、すなわち社会から疎外され、内面を持つに至る弱者を描いているかどうかという問題であった。これに続く芥川の「芋粥」「或日の大石内蔵之助」はまさに「人間」をキーワードとし、文壇に受け入れられる契機となった作品である。しかし、これらの作品にはむしろ「人間」という同時代的なパラダイムに対する批評性が内在していた。「芋粥」は、前半において語り手が顕在化して、主人公五位が弱者であるがゆえに持ち得た内面を「人間」として積極的に擁護する姿勢を見せるが、後半への展開において、その姿勢は顕著に後景化してゆく。それによって、「人間」という枠組の失効をパフォーマンスに示す作品となっている。「或日の大石内蔵之助」では、まず逆境ゆえに証される「忠義」という価値観が主人公内蔵之助の内面において確認される。次いで「忠義」から漏れるものが「人間性」と位置付けられるが、内蔵之助は自己の内的な矛盾に気付かざるを得ない。これらの作品は、状況や規範によって疎外されるものを個人の内面において肯定し直す「人間」的な論理がどこかで空転せざるを得ない瞬間を描いたと言える。

第四章は、芥川が自らに向けられた「新技巧派」という名称に言及した「南瓜」(大㉖)

について検討した。「南瓜」は不真面目と見なされていた市兵衛が殺人を犯し、真面目だったと認められるに至る、というのが筋である。市兵衛には豊富に虚構性の表徴が与えられ、市兵衛は虚構性を徹底していくことよって真実や現実の位相へとその意味を反転させていく。この反転は、虚構を真実の上へ置くというよりは、虚構と真実を分ける枠組を内破させるものとして描かれている。また、真摯さの欠如をたびたび難じられ「新技巧派」と呼ばれていた作家芥川の問題が作中で重ねられることによって、この問題は物語世界内から物語世界外へと伝染してゆく。それは虚構に固有の重層的な仕掛けの追求であった。

第五章では、「開化の殺人」(大3)について検討した。探偵は、ある種の知性のあり方であることが認められつつ、下等なものとして蔑まれてきたが、それは芥川へ向けられてきた批判と通じるものがある。「開化の殺人」は、「探偵小説」と銘打って発表されたが、探偵は登場せず、どのような探偵小説なのか明らかではない。近年初めて公開された本作の完成原稿の訂正の後について詳細に検討し、また、作中に織り込まれた演劇をめぐる表現や夏目漱石「彼岸過迄」との関わりを手がかりとして、一人称告白体の文体と演劇性の力学が葛藤する様相を分析した。そのことによって、告白という近代文学を強く規定する制度への批評性が本作の探偵小説性として認められることを指摘した。

第六章では、「龍」(大8)について検討した。「龍」は芥川自らが「同じやうな作品ばかり書く」という「死に瀕している」時期に書いた作品だと回顧しており、マンネリズムの作品だと見られてきたが、作品を見ると、むしろ自覚的に過去の作品との類似が強調されている。自らの作風への自己言及的な意識の高い作品であり、単なるマンネリズムで片付けることは安易である。この観点から読めば、本作では、虚構が真実のように信じられるとき、虚構の提供者と受け手との間にコミュニケーションが成立しなくなる問題を描いていることが分かる。虚構は一方では、それが真実であるかのように思わせることを目的とするため、これは虚構一般に妥当するアポリアである。本作は、この問題を重層的な語りの構造の中へ埋め込み、これが語られる対象の問題であるばかりでなく、語る側においてこそ問題になるということを示す。こうした虚構という営みのある種の不可能性を、一つの虚構の中で表現しようとするとき、表現するということ自体がいかに変質するか。そうしたことと対峙する作品が「龍」であった。

第七章では、これまで意味付け難い細部が多すぎるのが難点と評されてきた「疑惑」(大8)について検討した。聞き手である「実践倫理学」者にとって玄道の「狂人」「怪物」といった言葉がどのような意味を持ったかについて、当時の言説を踏まえて問い直せば、

本作に隠されたもう一つの物語の層が明らかになる。本作の背景として教育勅語撤回風説事件、哲学館事件、南北朝正閏論、「謀叛論」講演、伊藤博文暗殺事件などを踏まえることによつて、これまで単に意味不明とされてきた多くの細部は、いずれも政治的意味を示唆し、狂気が理智の虚構的なりやうを照らし出すものとして読み直すことができる。抑圧したものが疑惑として増幅・回帰するという玄道の物語の力学は、聞き手の「私」にも伝染してゆき、さらには読者をも射程に入れたものとして描かれている。

終章では、本論文で主に扱ってきたシニカルで理智的とされる作品群とは逆の評価を与えられてきた、「神聖な愚人」ものと呼ばれる作品群について検討した。これらの作品では、主人公の破滅をめぐって、それを無知で哀れなものと見做す視点と、それが主観的には救済であるという視点とが同時に描かれる。このモチーフの対立は、「羅生門」における、生の一貫した意味付けにこだわる語り手と、自らの従来の問題意識さえ忘れてしまう無知な主人公との対比以来のものである。芥川作品は、語り手の側にあつた懐疑のモチーフの側を物語構造の上で反復することによつて展開していったが、それは他方で「神聖な愚人」の可能性を抑圧し続けるものでもあり、そうした隠微な拮抗として芥川作品に潜在し続けたものであつた。芥川文学における生の意味付けへの懐疑は、常に生の意味付けに辿り着きたいという憧憬を動力源とし、かえつてそこから離れていったのだと見るならば、芥川文学がスタティックな意味付けを志向するものではなく、相反するベクトルの間で常に切実な振幅として運動し続けた秘密が理解できよう。こうした前期芥川文学の見通しを述べて、本論文の締めくくりとした。